蟻と蜘蛛とに關する若干の資料

〔日本産蟻類覺え書 (4)〕

岡　野　喜　久　麿

沼津市白銀町169

「蟻と蜘蛛に關する資料」と言へば、大體2つの事が直ぐ頭に浮ぶ。第1に兩者の戰鬪、第2に蜘蛛の網にかゝつて餌となる蟻の目錄である。私は上記の事に關して若干の資料を持ち合はせてゐるので以下に記述して置く。御參考にもなれば幸である。

×　　　　　　　　×

日本に於ける、蟻と蜘蛛との戰鬪に關する觀察資料と言ふものは殆んど皆無の狀態で、單に昭和12年 (1937)、小松敏宏氏の發表された「トビイロケアリの蜘蛛攻擊觀察記」〔昆蟲世界、XLI－2 (pp. 29－31)、3 (pp. 27－28)〕の1篇が見られるのみであらう。しかしこの報文とても自然の狀況に於ける觀察ではなく人爲的に戰鬪を行はしめた報告であるからには不充分であり、不滿足である。

この他先頃出た矢野宗幹氏の「蟻の世界」(岩波書店) に「蟻の形に自分を似せておき蟻に近づいて捕つて食ふものがある。蜘蛛の中にアリグモと言ふ類があるが、これがそれである」(p. 214) と書いてあが、前記小松氏文中にも「日本産のものについてはハヘトリグモの Myrmarachne 屬について一般に蟻や蟻の巢を攻擊すると信ぜられてゐる樣ではあるが確かな文獻もなく、筆者のクロアリグモ Myrmarachne innermichelis Boesenberg et Strand の觀察 (1936) に據れば左樣な事實は認められなかつた」(pp. 29－30) とある如く、そして又私の場合でも現在までの觀察にても未だその樣な場面には遭遇してゐない。

〔1〕蟻が攻擊する場合

(a) 單獨として：

昭和19年3月29日、靜岡縣富士郡岩松村萬野の近くの雜木林の中を歩いてゐた。春とはいへ、未だ木々は冬のまゝの姿であつたし、地面は落葉に埋れてゐた。

多分午後2時頃であつただらう、私はそこに奇妙な光景を見出した。一目散に逃げてゆく、蜘蛛としては稍々小形（大さ 1cm程）の1頭の蜘蛛目がけて、それよりは少し小形な1頭の蟻がこれ又すばらしい速度で突進して行くのである。そして蟻の速度優り、追縋つたと見るや蟻は何の躊躇なくそのまゝの勢で敢然ととびかゝつて行つた。兩者が1つの塊と合し、2～3秒ゴソゴソもみあつてゐるかと見るや、突然蜘蛛は又逃げ始めた。しかし蟻はそこに取殘されて地上にひつくりかへつてあがいてゐる。しかし蟻のあがいてゐるのも、さう長い時間ではない。多分4秒に滿たざる短時間だつた。次の瞬間には再びとび起きて蜘蛛の跡を追つた。しかし、目にもとまらぬ樣な、不斷蟻にはなかなか見られぬこのすばらしい蟻の速度の方が優つたであらう、再び蜘蛛は追ひつかれた。そして兩者は再びとつくみ合つたが先と同樣に蜘蛛は逃げ出し、蟻は地上にひつくりかへつてあがいてゐた。そして少し後には起きあがつて再び蜘蛛を追跡した……。

同じ事が2度も3度も繰返された。この命とり合ひの「鬼ごつこ」は私が來る大分前から始つてゐたのか、それとも私が來る直前に起つたものなのか知らないが、私が見てゐた間だけでも10回近く繰返しただらう。しかし後から考へれば甚だ殘念だつたこの又とない好機會を私は自分自身ぶち壞してしまつた。

採集家の悪い癖である。私はその觀察の結果を見る事よりも、この蜘蛛を狩る蟻はどんな珍しい種だらうか、もし逃したらといふ慮れの爲、この兩者の爭鬪を終りまで見とどけない内に蟻を毒管にすばやく投げ込んでしまつたのである。觀察は尻切れトンボの儘これでオジャンである。最後にうまく蜘蛛を仕止めたであらうか、今考へても最後まで見とどけなかつたのは甚だ殘念だつた。

蟻は Lasius niger に屬する1亞種（か變種）と思はれるが、この蟻の近緣者の分類は甚だ複雜にして難しい。未だ正しき種名を得られない所以である。蜘蛛は採集しないので判らないが多分キクヅキドクグモの幼體だらう。

さて先の蟻が地上にて數秒の間、ひつくり返つてあがくのは何故だらうか。次の事(1)蜘蛛に嚙まれるかした場合、蜘蛛の齒に毒があるため苦しむ、(2)蜘蛛にとびかゝつた際、網を吐きかけられる,——が考へられる。しかし(1)の場合としてはこの蜘蛛が毒を持つてゐるか否か判らぬが持つてゐない物と思はれる。もし持つてゐても、その毒の爲だつたらだんだん弱つてゆくだらうが、この場合にはその樣な樣子は見られなかつた。私は(2)の場合と考へる、それも口から吐き出す蜘蛛は極く特殊の物の如くだから腹部の紡績器から出す事は明であらう、私はそれに就て觀察してゐないがさう推測した。

(b) 集團として：

私の家の庭の一隅に、根元の附着したかなり太い Podocorpus chinensis Wall. マキの木がある。その西側の1本の地上1m50cm位の所に出來たかなり大きな洞狀（？）のキヅ跡がある。昭和18年8月23日、そのマキの木の前で蟻の觀察をしてをつた所、その西側のマキのキヅ跡に張られた店網に1頭（♀）の Camponotus caryae var. quadrinotatus Forel ヨツボシオホアリと2−3頭（♀）の Crematogaster laboriosa F. Smith トビイロシリアゲアリが懸つてゐた。そして猶よく見るとその店網に多數のトビイロシリアゲアリが集つてゐた。私はこれを——ヨツボシオホアリが誤つて網にかゝつて蜘蛛の餌となつたその死骸をトビイロシリアゲアリ2−3頭が見附けて餌としてひいてゆかうとして犧牲になつたもので、網の周りに集つたトビイロシリアゲアリは仲間を斃した店網の主を攻擊してゐるのだと考へた（この樣な事を小松氏はトビイロケアリにて實驗された)。そしてしばらく經つて蜘蛛はトビイロシリアゲアリの攻擊の爲、遂にゐたゝまらなくなつたのか又は私が覗いてゐたのを知つてか網からぬけだして幹を傳つて地上へ逃げ去つた。

蜘蛛は採集しないので種名は判らぬが Tegenaria sp. 又は Agelena sp. と思考される。

〔2〕蜘蛛が攻撃する場合

昭和19年3月下旬、はつきりした日はノートしてない。私は沼津市香貫山の西南へ派出した（沼津の町中より眺めた時、東屋のある）屋根の、自動車道路から少し入つた所で變な物がうごめいてゆくのに出會つた。何かしらと思つてよく見るとハヘトリグモの1種がオホズアカアリ Pheidole nodus F. Smith の兵蟻1頭を咥へてゆくのだつた。

蜘蛛は採集しなかつたが Hyllus lamperti ラムベルトハヘトリ又は近縁種ではなかつたかと思ふ。蟻を狩る蜘蛛は Myrmarachne の類ではなく、普通のハヘトリグモ類それも大形な貪食な種ではないかと思ふ。

× ×

蜘蛛の巣に懸つてゐる蟻に關する注意は極く最近からで、その爲次の1例―昭和19年8月18日、靜岡縣駿東郡愛鷹村青野にてヒメグモの1種 (Theridion sp.) の網に4－5頭（♀）のトビイロシリアゲアリが懸つてゐた――をしか擧げ得ないので今回は序までに附記してをくが、正式には稿を更めて後日書かせていただく事にする。